

○日本にお香が広まった出来事

595年4月、淡路島に「沈香」というお香のもとになる香木が浜辺に漂着したそうです。その流木に島民が暖をとるために火を点けたところ、とても良い香りが島中に広がったため、島民が朝廷に献上したのがはじまりと日本書紀に書かれているそうです。



○沈香とは・・・

何も手を加えない状態では香りがほとんどしませんが、焚くと良い香りがするそうです。

沈香の中でも特に上質な香りを放つものは「伽羅」と言い、値段も高く、1gで約20万円まで上昇したこともあります。

沈香の中に含まれている香り成分は38%くらいに対し、伽羅の中には50%くらい含まれているそうです。

○伽羅の香りはどのような香り？

伽羅は言葉では上手く表せないほど上質な香りであるため、よく「幽玄な香り」と表現されているそうです。



○沈香はどうやって出来るのか

沈香は沈丁花という木から出来ます。まず、動物が爪で木の幹を引っかいたり、台風など自然の様々な要因で木に傷が付きます。そうすると、傷の箇所から樹液が出てきます。この樹液が様々な菌と反応して150年くらい経つと沈香が出来るそうです。ただし、沈香が出来るにはその木自体が生きていることが条件です。完全に折れてしまっている場合は150年経っても出来ません。沈香は消費される量の方が圧倒的に多いので、なかなか自然に出来たものは手に入らないそうです。ですから、沈丁花の木に穴をドリルで空けて作る人工沈香もあるそうです。また、同じ沈丁花の木でも沈香になっていないところ（土の中にある根っこなど）は虫に喰われることがあります。沈香になった部分は虫に喰われません。



○香川とお香の関係

「香川」という県名はお香から由来している説が有力だそうです。五色台にある根香寺という寺の周辺には香木である楠が生えているそうですが、この寺から川を伝って、香りが人里へと流れてきたということから「香川県」という県名になったという説があります。



お香の歴史等について触れた後は、いよいよ香り袋の作成に取り掛かります。

○香り袋の作り方

香り袋は10種類くらいの原料を組み合わせで作ります。まずは、一つ一つ原料の匂いを嗅いでみて、自分の好みに合わせて規定の量より少し増やしたり減らしたりと調整しながらブレンドしていきましました。はじめに7種類の原料をブレンドしました。今回使用した原料は白檀、かつ香、丁子、安息香、龍脳、カミツレ、ムスクです。



<今回使った原料について>

白檀

白檀科の半寄生の常緑高木。甘い香りがする。鎮静効果があるので、薬としても使われる。インドやインドネシアが産地で、そこでは野生の蛇がよく白檀に巻き付くらしい。

かつ香

シソ科の多年草。かつ香の全草を乾燥させたもの。古来インド起源の薬物である。胃の運動を助けたり、肌を活性化させる効果がある。

丁子

江戸時代には切り傷や歯痛、やけどなどに効くものとして売られていた。また、ゴキブリよけとしても昔使われていた。防腐剤や消臭剤効果もあり、丁子が入った水に肉を漬けておくと長持ちする。

安息香

バニラのような甘い香りがし、お菓子等に含まれている場合がある。殺菌作用が強く、昔、ペストという病が流行った地方ではこれを使うことで流行がおさまったと言われていること。

龍脳

独特な香り（箆筒に入れる防虫剤に近い香り）がする。香り袋の匂いを嗅ぐと、一番最初に感じる香り。焚いた時、1秒で5m先まで香りが広がるらしい。白アリなど、ほとんどの虫が嫌いな香り。

講師によると、この香りが好きな人は、お香の香りが好きな人が多いとのこと。

カミツレ

キク科の多年草。リラックス効果があり、ヨーロッパでは、最も古い民間薬として知られている。

ムスク

独特な香り。香料として使う時は、原液を薄めたものを使用する。他の香りを際立たせる効果がある。例えば、白檀にムスクを入れると、白檀だけの香りよりも、より白檀らしい香りになるとのこと。

これらの原料をそれぞれスプーンで量って取ります。



ムスクまで入れたら、最後に「さくら」か「クマリン」のどちらか好きな香り成分を入れます。講師曰く、どちらとも入れてしまうと良い香りになる補償ができないそうです。

<試しに香りを嗅いでみると・・・>

さくら：とても爽やかで上品な香り。



クマリン：桜餅みたいな甘い香り。桜の葉の中に入っている香り成分の一種であり、他の植物の成長を阻害する

効果があるとのこと。



一通り原料を入れ終わったら、スプーンでよく混ぜ合わせます。

混ぜ合わせたら、一度香りを嗅いでみましょう。

その後、講師が受講生一人一人に自分でブレンドした香りがどんな香りかを聞いてまわり、もう少し香りをかえたい人にはどの原料をどのくらい足せばよいかなど、アドバイスをしていました。また、受講生どうしもお互いにどんな香りになったか確認し合っていました。少しの分量の違いで、香りはかなり変わるようです。比較的、丁子の香りが強めの人が多かったように感じました。



次に、調合した原料の半分の量を和紙でできた（縦約7cm×横約5cm）の中に入れ、袋の口を閉じます。こうして出来たものを文香（ふみこう）というそうです。お薦めの使い方として、そのまま財布や名刺入れの中などにに入れて香りを楽しむとよいそうです。

そして、文香（ふみこう）で使わなかった余りの原料は布地の香り袋（縦約7cm×横約5cm）の中にすべて入れます。原料を入れた上から少量の綿を入れ、袋の半分くらい（約6～7分目）まで押し込みます。こうすることで、粉が飛び出すのを防ぎます。綿の量は少量でかまいませんが、気持ち多めの方が、完成したときに丸みを帯びた形になって可愛らしくなります。綿を押し込んだ後、袋の真ん中より少し上あたりを指でつまんで袋を閉じ、そこに白糸を掛けて結びます。袋の閉じ位置に糸を一周させてからギュッと玉結びをしますが、これが意外と難しいそうです。出来るだけ糸を引っ張ってしっかりと結びましょう。その後、蝶々結びをして完成です。



「香り袋と文香は、元々は仏様に香りをお供えするために出来たものなので、帰宅後、仏壇に一回お供えしてから使ってください。」と講師が受講生に伝え、講座が終了しました。

